

## 関連学会印象記

# 第66回 American Heart Association's Scientific Sessions 印象記

菅 弘之\*

米国心臓協会 (AHA) の1993年度学術集会の Named Lecture (冠講演) の一つである Paul Dudley White International Lecture の本年度の講演者として招待されたのを機会に、5年振りに本会に参加したので、1993年11月7-11日の会期を通じての印象を述べてみたい。

本会は年々規模が大きくなり、本年度は世界77カ国から3万人強の参加者を得て、ジョージア州アトランタ市の中心部にある世界会議センターで開催された。発表演題は3561件であったが、これは応募演題11336題の内から選ばれたものであり、採択率が31%と厳選されたものである。応募演題の半分が米国内から、他の半分が外国からのものであり、その内日本からのものが、一番多く、次いでドイツからとのことであった。日本を含め、米国外からの応募が年々増加しているとのこと、日本の善戦に嬉しくなった。筆者が1970年代に米国留学中何度か参加した時には、日本からの直接の参加は非常に少なく、留学中の日本人がわずかに参加していた程度であったことを覚えている。それから15-20年で、日本の経済力も上がり、学問レベルも上がり、現在のような勢いまで到達したことに感無量である。

11月7日の日曜日には、Sunday Afternoon Sessions として狭心症治療の問題点、心臓内科医のための集中治療、EDRF による血管収縮度の調節、循環器病における分子生物学などに関する講演が9会場に別れてあり、盛況であった。これらは予め予約をしておかないと入場できないセッションである。私は分子生物学に関するセッションを聞いたが、最近の発展の速さに驚嘆した。ま

た、夕方からは、Postgraduate Seminars として12会場を使ってセミナーが開かれ、循環器病に関して基礎から臨床、疫学に渡って広いテーマの教育講演がなされた。ちょうどその時刻には、会長主催のレセプションに招待されていたので、聴講の機会を逃したが、会場は混んでいたようであった。

8日の月曜日の8時45分から会場内最大の大ホールで開会式があり、Moller 会長の開会講演を拝聴した。AHA が基本的にはボランティアによって運営されている協会であり、民間からの寄付によって成り立っている団体であること、Scientific Sessions はその活動の一部であること、循環器病の克服にとって動物実験が不可欠であること、治療とともに予防活動も非常に重要であること等などが強調された。次いで、Named Lecture の一つである Lewis A. Conner Memorial Lecture が Fuster 教授によってなされた。演題は“Mechanisms Leading to Myocardial Infarction-Insights From Studies of Vascular Biology”であり、最近の血管生物学の集大成的な名講演であった。

それに引き続き、30数会場に分散して多岐の分野にわたっての口演発表が始まり、同時にポスター会場でも展示、討論が開始され、3日半にわたって会場には熱気が満ち満ちた。筆者は自分の専門分野の口演とポスター会場のみしか顔を出さなかったもので、全貌を知る由もないが、心臓にしる血管にしる、分子生物学的、遺伝子工学的な手法を導入した研究が非常に多くなってきているという印象を強く受けた。例えば、セッション名では Cellular cholesterol mechanism, Arteriosclerosis transgenic models, Intracellular signaling in

\*岡山大学医学部第二生理学教室

vascular cells, cellular mechanisms for ischemic arrhythmias, Coronary circulation-endothelium, Cardiovascular developmental biology, Arteriosclerosis gene expression, G-protein-coupled receptors, Molecular regulation of coagulation, Myofilament calcium sensitivity and calcium dynamics, Cardiovascular cellular and molecular biology 等々である。セッション名は例え Myocardial contractility, Preventive cardiology 等であっても、その内には細胞、細胞下レベルを対象としたものも混ざっているので、全体として、分析手法を用いたものが多いという印象である。もちろん、臓器レベル、循環系レベル、全身という複雑な系の機能を取り扱う研究も、新しい計測法、分析法、概念を用いての新規な基礎的、臨床的研究も多く、やはり世界最大の循環器病の学会にふさわしい内容であった。詳細は、Circulation Vol. 88, Number 4, Part 2, 1993 を見られたい。この号の巻末には立派な Subject index が備わっていて、key word 並びに発表者名からの索引が容易に出来る。

自分にとって肝心な特別講演は9日の午前9時から45分間メイン会場で行った。演題は“Cardiac Performance as Viewed through the Pressure-Volume Window”で、私が東大大学院生時代に学位論文の中で提案し、その後故佐川喜一教授と共に発展させた心収縮性の指標 Emax と、その後その延長線上で提案した心エネルギーの指標圧容積面積 PVA に関しての25年の長きに

わたる研究をレビューした。座長は昨年の会長の Cooper 教授、一昨年会長の Weisfeldt 教授の二人であり、くしくも後者は筆者の留学時代以来の旧知の間であり、不思議な巡り合わせを感じた。講演の後は座長から記念の盾を戴いた。また、これを記念して同日の晩餐会では Clinical Cardiology Council の Honorary Fellow に任ぜられ、その旨を記した立派な盾を戴いた。この講演の冠にある White は、WPW 症候群の後の方の Wとして名前が残っている有名な White 博士のことである。彼が AHA の会長をされていたのは1941年であるが、これは私が生まれた年に当たる。この冠講演には1986年に初の日本人として京都大学第3内科の河合忠一教授(当時)が選ばれているので、私が二人目の日本人である。全く夢のような経験である。

アトランタ市は目下次回のオリンピック開催に向けて準備中であり、イメージアップのために治安が少しは良くなっているとのことであったが、留学中の日本人に聞いてみると、必ずしも安全ではなく、ダウントウンの夜の一人歩きは絶対にしないほうが良いと釘を刺された。幸いに無事に帰国できた。

来年は、11月14日-17日にテキサス州ダラス市で開催されることになっている。参考のために、AHA の連絡先は、American Heart Association, Scientific and Corporate Meetings, 7272 Greenville Avenue, Dallas, TX 75231-4596, USA. FAX +1-214-373-3406 である。